

氏名(本籍)	すぎ 杉 さわ 澤 ゆう 悠 か 圭 (宮城県)
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博甲第5843号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	乳幼児の社会能力に影響する育児環境要因に関する研究
主査	筑波大学教授 医学博士 本田 克也
副査	筑波大学講師 博士(医学) 宮園 弥生
副査	筑波大学講師 博士(医学) 前野 貴美
副査	筑波大学講師 博士(医学) 奥野 純子

## 論文の内容の要旨

### (目的)

子どもの社会的不適応の増加が教育上の問題となっている現況を踏まえ、子どもの社会能力習得の指針を得るための研究を行った。まず社会能力評価 Interaction Rating Scale (以下、IRS) の信頼性、妥当性の確認を行い、乳幼児の社会能力に及ぼす縦断的な育児環境要因の影響を明らかにすることを目的とした。

### (対象と方法)

IRS の信頼性、基準関連妥当性の検討では、18 か月児 231 名とその養育者を対象とした。IRS のクロンバック  $\alpha$  係数を算出し、さらに IRS と関連指標である NCAST-AVENUW Parent-Child Interaction Program Teaching Scale (NCATS) を用いて観察評価を行い、両指標間の相関変数を算出した。

データ収集は 4m × 4m 四方の観察室に子ども用の机と椅子、6 台のビデオカメラを配置、子どもと養育者のかかわりを観察評価した。判別妥当性の検討では、2 歳から 6 歳の子ども 33 名を対象とし、発達障害等の子どもに IRS を適用、得点分布を分析した。併存的妥当性の検討では、30 か月児 370 名を対象に、IRS で測定した子どもの社会能力と Strengths and Difficulties Questionnaire (以下、SDQ) で測定した子どもの問題行動や向社会的行動との相関係数を算出した。社会能力への影響要因分析では、18 か月児 246 名とその養育者を対象とした。子どもの社会能力評価には IRS を用い、育児環境の測定には、Index of Child Care Environment (以下、ICCE) を用いた。統計解析は、主としてロジスティック単回帰分析を行い、子どもの社会能力得点(高得点群、低得点群)と育児環境の変数(継続ネガティブ群、非継続群、継続ポジティブ群)との関連を分析した。単回帰分析で統計的に有意な項目に関して、性別などの属性を調整した多重ロジスティック回帰分析を実施、複合的な関連を検討した。

### (結果)

IRS のクロンバック  $\alpha$  係数は、IRS 全体 0.91、子ども領域全体 0.88、養育者領域全体 0.85 であった。IRS と NCATS の相関は、IRS 得点と NCATS 得点で相関係数 0.89、子ども領域得点では 0.70、養育者領域得点では 0.98、(いずれも  $p < 0.001$ ) であった。判別妥当性の検討では、発達障害等の非該当群は、IRS の関係性総合評価がすべての領域で「よくあてはまる」であり、全体的にポジティブ方向評価の一方で、該当群につ

いては、ネガティブ方向に評価される者が多くなっていた。併存的妥当性の検討では、IRSで測定した「共感性」(相関係数 $-0.17$ 、以下同様)、「運動制御」( $-0.15$ )、「感情制御」( $-0.18$ )の得点と、SDQで測定した「多動」の得点がそれぞれ負の相関を示す( $p < 0.01$ )など、IRSとSDQの得点に有意な関連がみられた。縦断的な育児環境要因が社会能力に及ぼす影響を分析した結果、18か月時から30か月時に継続して「子どもと一緒に歌を歌う機会」、「配偶者の育児協力の機会」があると子どもの社会能力得点が高くなる傾向が示された。

#### (考察)

IRSについては乳幼児の社会能力を評価するための信頼性、妥当性のある指標であることが多方面から確認された。乳幼児の社会能力に影響する育児環境要因としては、家族構成や両親の学歴、職業や経済状態といった両親の特性との関連性は認められず、子どもと一緒に歌を歌うことや、養育者と配偶者双方の多様で継続的なかわりを行うことなど、子どもとのかかわり方が強く影響することが示された。乳幼児の社会能力の発達を促すためには、特に歌を通じて、あるいは両親がともに養育するなどの、理性よりむしろ感性を育てるような情緒豊かなやりとり、及び複数の養育者で子育てにかかわることが、子どもの社会能力育成と密接に関わっていることが示唆された。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

予備審査においては研究の背景や目的、IRSの有用性、統計解析の意味と適用の妥当性、論文構成や記載方法の説明を求めたところ、適切な回答が得られ合格と判定された。最終試験においては基本用語の使い方、結果の意義や今後の展望などについて試問を行った。結論としては、乳幼児期の社会的環境に着目し、養育者の特性にかかわらず、子どもの関わり方によって社会能力が高められること、特に感性を育てることが社会能力と関連していることを明らかにしたことは評価すべき点である。今回得られた知見を基礎にして、長期間のフォローアップ・スタディを行えば、さらに画期的な成果へと結実する可能性があると思われる。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。